



撮影：2017年8月
(長崎県 東彼杵町)



あの日のあの川 リレー日記 ～第35話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第35話主人公 南波祐生

(筑波大学大学院 システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：千葉県利根川)

「川を好きになった日」

いつのこと？：22歳のこと

どこの川？：串川

今月号を任された南波です。正直に申し上げますと、私はこのような文章を書くことを任されるようなタイプではないので～～～です。今も本当に自分が書かないといけないという事実を受け止めきれず、最後までこの責任を逃れようと必死に交渉しています。しかし、OBの川系男子からの繰り返される催促により、泣く泣く自分の川への思いをここに込めようと思いました。

まず自分の出身地は千葉県の野田市というところですが、ここは二つの大きな川、利根川と江戸川に挟まれた土地です。川を見てもわかるように、子供では入ったら間違いなく死ぬような印象がありました。学校でも川には入るなと言われていて、大学生になって地元を離れるまで一回も川に入ったことはありませんでした。そう、私は近くに川が流れている土地に住んでいましたが、川との思い出が一つもありませんでした。

そんな私ですが、大学院で白川先生の川の研究室に入ってから転機が訪れました。それは川との接点を持たないといけなくなったということです。それは大学の近くの川を見に行ったり、川の中を8kmも走るマラソン大会に参加したりと、23歳の川への興味がそんなになかった私には「嘘だろ...」と思わざるを得ないイベントでした。こんなに無理やりにも川と接点を持ち出すとさすがに川を無視できない自分を認めざるを得なくなっていました。



白川研のイベントはまだ終わりません。この研究室の一大イベント東彼杵でのゼミ合宿です。今回テーマにした川のある場所です。このゼミ合宿は白川研のADS(あゆ、どじょう、しじみ)班が地元の人と協力して遡上実験や養殖を試みるというものでした。自分は ADS 班ではないので、この班の人たちのお手伝いという形で行きました。何をやるのかは当日までわからない、お楽しみ?合宿でした。初日から遡上実験をする魚がいないため、川に自分たちが入り捕まえに行きました。自分たちは遅れて入ったのですが、先に入っている人たちが水や泥で体を汚くしているところを遠目でみると入るのは気が引けました。しかし、川に入ろうとしないのは女の子の中でも本当にきれい好きで川には絶対入らないという信念を持った人だけだったため、しょうがなく入りました。川に入ったところ案の定という感じでした。真っ先に靴と靴下に浸水し、自分の心にも川が浸水してきました。靴と靴下と心、これ以上は浸水させまいとしていましたが無理でした。研究室の同期からの水かけにより服にも浸水し私の意志はもうお亡くなりになりました。どうでもよくなってしまったので、川の深いところに入ったり、草の下や岩の下から魚を捕まえるという自分のイメージと違うことをし始めました。いつまで川の中に入っても一向に終わる気配が見えず、疲労はピークに達しました。諦めて引き返そうとしたとき自分

の視界に形容しがたいが、昔の子供はこの景色を見て育ったんだろうと感じざるを得ない昔ながらの夏だーという景色が広がりました。今まで The 現代っ子として生きてきましたが、この瞬間に自分の中に眠る昔ながらを心から楽しむ自分が目を覚ましたような感覚になりました。それから疲れが吹き飛んだかのようにまた川で遊び始めました。このゼミ合宿は四日間にわたるもので四日間ともに川に入るとは思っていませんでしたが初日のあの感覚の甲斐あってか、疲れはしましたが毎日が楽しい川遊びをするゼミ合宿でした。来年も白川研究室ではこのゼミ合宿はもちろんあるし、川にまつわるイベントはたくさんあります。この一年川への興味の元川についてしっかり勉強し、これらからのイベントをより心から楽しんでいこうと感じた一年でした。



(次号は3月号にて加藤さんにバトンを託します)